

ンター(南)



Project
Report

2015.09.30

奈良県立医科大学附属病院 小児センター

森のフェスティバル ～笑顔をつなげて～

Project data

- 壁画 デザイン・制作 / 中島 良二
- 立体作品
(原作) 中村 真由美
(制作) 社会福祉法人わたぼうしの会
たんぼぼの家アートセンター HANA / Good Job! センター
- 家族説明室・ファミリールーム デザイン・制作 / 谷本 理子
- ワークショップ 企画 / 福家 真紀

(協力) 京都造形芸術大学のみなさん ボランティアのみなさん
期間 平成 28 年 8 月 1 日～8 月 16 日

ひろばにはみんなを見守るひととき大きな榎の木が立っています。
森からかすかに聴こえてくる音楽、
動物たちはフェスティバルに向けて準備をしています。
そしてちびっこひろばへと集まっていきます。
大きな榎の木がある森のひろばで動物たちの
楽しいフェスティバルが始まります！

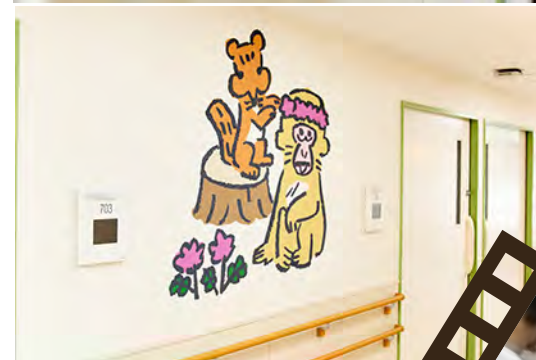
Concept

新しく病棟をオープンする時にはアートを取り入れたい、というスタッフの長年の思いをお聞きし、新病棟全体が子どもたちを「大きく包み込む榎の木の森」として提案しました。

不安や痛みを抱える子どもたちやそのご家族が笑顔になれるよう、スタッフさんも絵筆を握って制作に参加し大勢で創り上げた空間は、センターが大切にする「チーム医療」という理念にも繋がっています。

市の木である大きな「榎の木」を中心に展開し、あたたかで寄り添える空間へ。その根底には、子どもたちの明日のために「笑顔をつなげていきたい」というスタッフひとりひとりの強い気持ちが込められています。





壁画



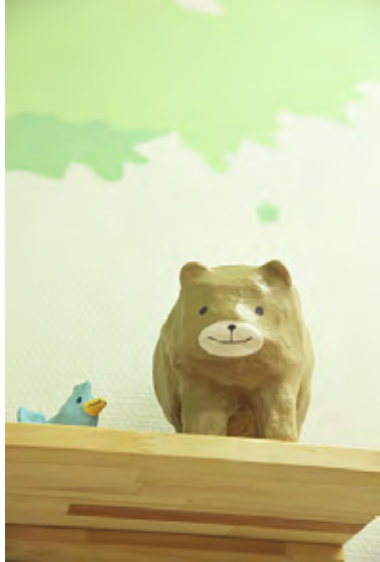
中島良二さんの原画（一部）

病院を囲む美しい奈良の山々からひょっこり遊びにきたかのような愛嬌のある動物たち。

看護師さんから「笑っている表情だけでは時にしんどい場合もある」という言葉から、こちらの状況によって表情が違って見える中島さんの動物たちがびったりと思い、今回お願いをしました。柔らかいタッチの線を苦勞しながらも、たくさんボランティアさんとスタッフさんで描きました。

先生からの強い要望で処置の部屋の天井にも描いています。





動物の張り子がやさしく見守る

家族説明室

病状の説明を受ける部屋は緊張をほぐしてくれるような優しい風合いの張り子を設置することにしました。

この張り子は、奈良市内の障害のある人がアートを仕事にする福祉施設「たんぼぼの家アートセンター HANA」の中村真由美さんが作る張り子をアレンジしたものです。制作は「Good Job! センター」の皆さんに協力していただきました。

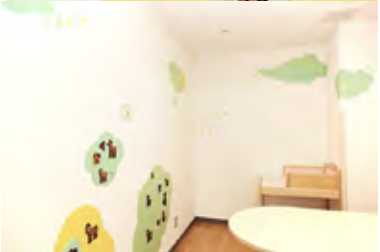
張り子を設置する壁面や飾り方にも工夫を凝らし、窓のない無機質な部屋が風の「そよぎ」や木々の「さざめき」が感じられる部屋になりました。

家族で過ごすひととき、 楽しく過ごせますように。

ファミリールーム

大好きな家族と会える面会の部屋は楽しい雰囲気にと、「こもれび」がふりそそぐ森の中で、中村真由美さんがデザインした動物をマグネットに加工し、子どもたちや待っている兄弟たちが遊べる壁面にしました。

壁面デザイン・制作担当
谷本 理子さん



どんぐりギャラリー



檀原はむかし、榎の木が多く生えていたそうです。

どんぐりの形をした額に、子どもたちや看護師さんがレクリエーションなどで作る作品を継続的に飾り、それぞれの季節の変化が感じられるギャラリーにしました。

夏祭りのワークショップで、子どもたちの足型や手型をベースに、お母さんも一緒に参加しながら動物になってフェスティバルに参加しました。

フレームやガーランドにデコレーションし、オープンの記念としてにぎやかに壁面を飾りました。

ワークショップ企画
福家 真紀さん



“みなさんの声”

脳内で何度もシミレーションし飽きがこないように、でもさみしくないように考えました。ところどころの仕掛けに気づいてもらえたら嬉しいです。そしてこの絵をふと見た時に、口元が少し上がってくれば充分です。

中島さん / 壁画作家

小児センターを代表して、この企画に携わってくださった全ての皆さまに感謝いたします。

私たちがホスピタルアートに参加できたという、こんな光栄で貴重な体験をさせていただき、医療従事者として幸せの一言です。

今から子どもたちの驚く顔、喜ぶ顔が目に見え、楽しみでいっぱいです！

小児センター師長

光や風を感じて、少しでも気持ちがやわらげば…

谷本さん / 家族説明室・
ファミリールームディレクション

手作りの作品が患者様の大切な方たちとの笑顔や温かな気持ちを引き出すコミュニケーションツールとなれば嬉しいです。

福家さん / ワークショップ講師

検査へ向かう道すがら、面会に来ていた家族が帰ってしまった後、

夜みんなが寝静まったあとのトイレ…。

不安や恐怖、さみしさをやわらげてくれるだろうな、と。と同時に、壁の動物たちは、沸き起こるあらゆる感情に、居場所を作ってくれるようにも思えました。

笑ってもいいし、泣いてもいいし、怒ってもいいし、前を向いても絶望してもいいのかもしれないね、って。「寄り添う」とはきっとそういうことなのだろうな、という気がしました。

家族の立場だったらどう観るかな、という点では、わが子を病院へ置いて帰るときの罪悪感のようなものや、後ろ髪引かれる思いが軽減されるだろうな、と思えました。壁の動物たちに「うちの子よろしくね」とそつと言えそうだな、と。

そうすると、あちこちから「まかせといてー」と声が聞こえてくるのです。

お医者さんや看護師さんたちからすると、実際に描かれたということもあり、壁の中の彼らは、同志であり、戦友のような存在にこれからどんどんとなっていくのだろうな、という感じがしました。

お披露目会参加者

ボクのおやつ、あげるよ！



お披露目会にママと参加してくれた〇〇君、壁画のシカやお花にお菓子を食べさせてくれていました。